

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2023年3月20日

No.143



復元工事完了直後の旧三岡家長屋門。かやぶき屋根が新しく、周辺は樹木を植えたばかりでした。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その8…旧三岡家長屋門
- 3 最近の発掘調査
西府文化センターで縄文時代の石囲炉を発見
- 4-5 NOTE
家康時代の大国魂神社本殿
- 6 展示会案内
企画展 府中の旧家にあった書画たち
- 7 多摩川今昔
④アユは帰ってきたけれど…
- 8 太陽系惑星ツアー
⑧太陽系最果ての惑星 海王星

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在8棟の建物が移築・復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてにつくられた特徴的なものばかりです。各建物について移築・復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を紹介するシリーズの最終回です。

その8…旧三岡家長屋門

郷土の森がオープンしてから7年後の1994年（平成6）2月、敷地内の西側に移築・復元された旧三岡家長屋門です。隣接する体験学習施設である「ふるさと体験館」の新築にあわせて復元されました。

復元建物、郷土の森に建つ

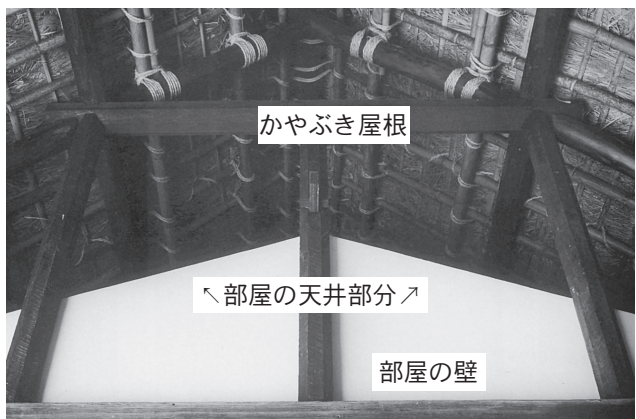
その 8… 旧三岡家長屋門

今回紹介するのは、郷土の森敷地内で最後に移築・復元された建物です。しかもこれまでと少々異なり、居住や業務を主目的としたものではなく、敷地を出入りする「門」のみの復元です。

建物の中央を通行する出入口としての役割だけでなく、両側に物置にしたり人が住めたりする部屋があります。こうした形式の門を「長屋門」と呼びます。もともとは武家屋敷の門の一種ですが、大きな農家につくられることがあり、現在でも全国各地の旧家でその姿を見ることが出来ます。

旧三岡家長屋門は、江戸時代後期に是政村（現是政）の村役人である「年寄」をつとめた三岡家にありました。この家は、「庄屋」という屋号で知られていました。ただし、この家が名主（庄屋）であったことはないようで、なぜこの名がついたかはよく分かっていません。

この門最大の特徴は、「置き屋根」形式です。置き屋根とは、その名の通り建物の上に屋根が置いてある建築形式です。門の中央から真上を見ると、竹やかやでふかれた屋根裏を確認できます。しかし、土壁づくりの部屋の内部から見上げると天井があり、屋根裏は見えません。部屋にはもう一層、土と木で天井がつくられており、さらにその上にかやぶきの屋根が骨組みごとかぶ



長屋門の中央から見上げると、部屋の上にかやぶき屋根が置かれ、その間に空間がある様子を確認できる。



1991年（平成3）鉄板の屋根だった解体直前の長屋門

さって（置かれて）いる構造なのです。天井とかやぶき屋根の間には風通しのよい空間があり、草木でふかれた屋根の天敵である湿気が残りにくくなっています。さらに、万が一火災が起きても土に覆われた部屋の内部は燃えにくくもあります。つまり、安全かつ長持ちする構造なのです。

置き屋根形式の長屋門は近隣に残っておらず貴重であったため、郷土の森敷地内に移築・復元、保存されることになりました。1991年（平成3）の解体調査の結果、部材に「文政十二丑正月吉日」と記されていることがわかり、江戸時代の1829年にこの門がつくられたことが判明しました。こうした工法の貴重さや調査の成果から、解体の翌年に府中市指定文化財となりました。

復元にあたり、大正時代にリフォームされたという鉄板ぶきの屋根は、建築当初のかやぶきに戻し、可能な限り建築時を想定した形としました。また、江戸時代の母屋はすでに取り壊されており、門のみの移築・復元であったため、その活用方法も検討されました。その結果、体験学習施設「ふるさと体験館」を隣接して新築し、長屋門はその敷地への出入口＝象徴として位置づけられることになりました。

1994年2月に復元工事が終了し、さらにその翌年には、市指定から東京都指定文化財にグレードアップしました。現在、門の部屋内部は公開していませんが、体験学習用のワラなどを収納する場所として活用しています。長屋門とふるさと体験館は、他の復元建物、梅園、水遊びの池などからも離れた場所にあります。しかしこれらの建物は、見学・体験施設であるだけでなく、現在では樹木や草花との調和が絵になるロケーションで、撮影スポットとしても人気です。ぜひ足を運んでみてください。（佐藤智敬）

西府文化センターで

縄文時代の石囲炉を発見

西府町一丁目 府中市ふるさと文化財課 佐藤 ななみ



縄文時代の石囲炉
手前側は破壊されている

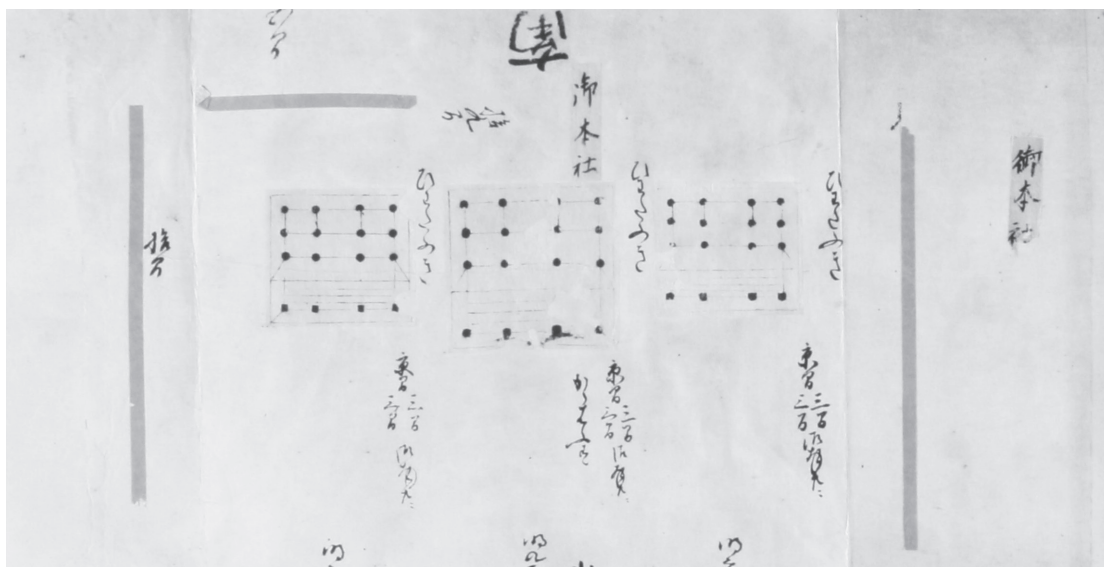
今回紹介するのは、西府文化センター敷地内の調査で発見された縄文時代中期の炉の跡です。今から約 5,000 年前のものになります。

縄文時代には、円形に地下を掘りくぼめた^{たてあな}竪穴建物が多く造られていました。当時の柱や屋根は木材等だったので腐って残っていませんが、竪穴状の掘り込みや、火を焚くための炉、柱を立てるための小穴などを見つけ出すことができます。西府駅の周辺には竪穴建物跡が 26 棟見つかっており、縄文時代の集落があったことが分かっており、「本宿町遺跡」と呼ばれています。今回紹介する建物は、これまで発見された建物の中で最も西側に位置しており、集落がここまで広がっていることが分かりました。

さて、それでは今回見つけた炉をみていきましょう。写真を見ると、四角く穴を掘って、周りを石で囲っていることが分かります。これは「石囲炉」と呼ばれる形態のもので、この他の炉としては土器を使った土器埋設炉等があります。現代の工事で写真手前側が壊されて、二辺は石ごと切断された状態でしたが、残っている一辺の石からおおよその炉の大きさが 50cm 前後であることが分かりました。持ち運ぶのが大変なほど大きな石を使っています。炉の中の土は火を焚いたことで赤く変色しており、この土の中から縄文土器が出土しました。竪穴建物の掘り込みは後世に壊されて残っていないため、建物の正確な規模は分かりませんが、上屋を支える柱穴は見つかっているため、竪穴建物の内部の炉と考えています。今回発見されたのは竪穴建物跡 1 棟のみでしたが、調査区内からは広い範囲で縄文土器片や石器が見つかるため、周辺にも竪穴建物跡が埋まっている可能性があります。「本宿町遺跡」は今後も新発見が期待できる遺跡といえるでしょう。



本宿町遺跡の竪穴建物跡分布図



三棟が並ぶ本殿

「御社頭古図」部分（複製・本館蔵、原資料は大国魂神社蔵）

府中の中心に鎮座する大国魂神社。その本殿は徳川4代将軍・家綱の時代、寛文7年（1667）の再建です。三間社流造3棟を横に連結したような特殊な構造で、東京都の文化財に指定されています。今回は、この現存本殿の一代前の姿を探ってみたいと思います。

▼ 大国魂神社とは

大国魂神社は、明治に改称されるまでは六所宮とか六所明神の名で親しまれていました。この旧社名は武蔵国の主要な神々、すなわち一宮から六宮を合祀したことに因み、武蔵国の総社として崇敬を集めてきました。国内の武士たちの精神的なよりどころであったことはもちろん、源頼朝が妻・北条政子の安産祈願のために使者を派遣しているように、源氏とゆかりのある、関東の有力な神社としての歴史をたどってきました。

天正18年（1590）、豊臣秀吉が関東の覇者として名をはせた小田原北条氏を制圧すると、徳川家康は秀吉の命で関東に移封されて江戸に本拠を構えました。そして翌年には、武蔵国内の寺社に対して所領の領有を保証していますが、この時、六所宮は破格の500石を与えられています。

武蔵国の古社というだけでなく、源氏にゆかりの深い六所宮を丁重に扱うことは、源氏を自称する家康にとって大きな意味があったのででしょう。

ところが、このように好遇されたものの、当時、境内は荒廃していました。前年の北条氏と豊臣方との戦いは関東各地に及び、府中でも六所宮の社殿が戦火を被り、免れたのは楼門のみだったようです。

▼ 3棟が並ぶ本殿

境内の復興は慶長年間（1596～1615）のことで、11年に竣工したとされています。慶長10年に秀忠が将軍職に就いていますが、家康は大御所として健在でした。家康の信任厚い大久保長安が造営奉行を勤めましたから、家康の命で再建が進められたとってよいでしょう。

この時の再建事業は大規模なもので、境内社殿・堂舎等を一新するものでした。その様子は、慶長11年の状況を描いたとされる「御社頭古図」（上写真）や文政11年（1828）に神主が認めた『新撰総社伝記考証』等によって知ることができます。今回のテーマである本殿については、三間社流造の本宮正殿、東正殿、西正殿の3棟が東

西に並んでいたことがわかります。ただ、『新撰総社伝記考証』の成立が江戸時代後期と遅く、「御社頭古図」についても制作年が明らかでないため、慶長造営の姿を正確に伝えるものか、不安がないわけではありませんでした。

▼「匠明」に残る指図

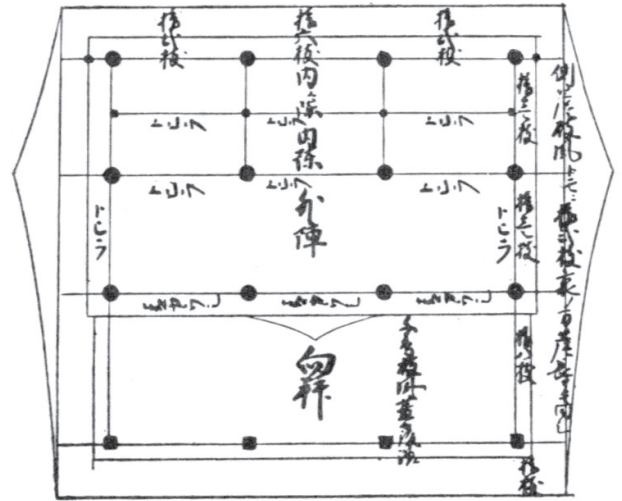
ところが、慶長期の造営に携わった大工の記録に六所宮の本殿の指図（絵図面）があることがわかりました。「匠明」です。建築史の世界ではよく知られた史料ですので、新発見というわけではないのですが、府中では認知されてこなかった事実といってよいでしょう。

「匠明」は、建物の種類、構造、規模により各部材の寸法や標準的な納まり、意匠等を示した木割書というマニュアル本の一つです。門記集、社記集、塔記集、堂記集、殿屋集の5巻の巻物からなり、それぞれに簡単な平面図等もあります。著者は平内正信という紀州根来寺（和歌山県岩出市）出身の大工で、秀吉に認められた後に江戸に本拠を移し、寛永9年（1632）には徳川幕府の作事方大棟梁に任じられています。この職は幕末まで11代にわたって平内家に継承されました。

六所宮は、「匠明」の社記集の「三間太社ノ図」の作例として挙げられています。平面図とともに木割が記され、その末尾には「武州府中六所大明神二正信作之」とあって、六所宮の指図とわかります。『新撰総社伝記考証』では慶長造営に携わったのは「相模国築井県与瀬駅」（相模原市緑区与瀬）の「大工作兵衛」としていて、平内正信の名は見えません。この理由は定かではありませんが、いまだ若年で中心的な役割を担うほどではなかったのかもしれませんが。

それはともかく、三間社流造の本殿の様子は、「御社頭古図」よりも幾分詳しく記されています。厳密に言えば平面図ではなく、平面図に屋根伏図と軒見上図を重ねたもので、これによって、間取りは内陣、外陣、向拝からなり、柱間数は正面三間、側面・向拝とも三間であったことが確認できます。また、流造の屋根は檜皮葺で、正面には千鳥破風が設けられていたこともわかります。

ただ、「匠明」には1棟の図面しか載せられていません。3棟とも同じつくりであったために省



「匠明」の三間太社ノ図
（『匠明』1971年 鹿島出版会より）

略したとみるのが素直でしょうが、「御社頭古図」では中央の本宮正殿は東西正殿に比べてやや大きく描かれ、本宮正殿のみに「からはふ有」の書入れがあります。この相違の理由はわかりません。

このように詳らかにできない点もありますが、幕府が直接造営に取り組んだ六所宮の指図が一部ではあれ記録されている点は貴重です。

そもそも、千鳥破風や唐破風をのせた三間社流造はあまり目にしない様式です。大阪府岸和田市にある横川神社本殿は、慶長8年に豊臣秀頼の命で大修理したもので、正面に千鳥破風が付けられています。六所宮に比べてかなり大きいのですが、年代も近く、参考になる事例といえそうです。

▼家康も参詣した六所宮

さて、この時に復興された六所宮には、とうぜんのことながら家康も参詣したはずですが、記録こそないものの、家康は駿府（静岡市）に隠居しながらも、大好きな鷹狩りで江戸の近傍を巡ることたびたびでした。自ら府中を訪れる計画を立てること数度。六所宮西方に設けられた御殿に休憩・宿泊したようです。しかし、本殿のみならず、家康が目にした社殿等は、正保3年（1646）の府中宿大火で焼失。次の再興は、冒頭に述べた4代将軍の代のことです。この時造営されて唯一残る建物が現在の本殿です。

企画展 府中の旧家にあった書画たち

4/15 (土) ~ 5/21 (日)

会場：本館 2 階企画展示室

江戸時代後期には、裕福な庶民の多くが家の中に床の間を設けるようになりました。生け花や茶の湯などの遊芸をたしなむ者も増え、床の間は彼らの表現の場として演出され、季節の草花やその時々合った書画が飾られました。

このため、府中市域の旧家から当館に寄贈・寄託された資料の中には、しばしば軸装された書画が含まれています。これらは、収蔵庫で大切に保管していますが、府中の考古・歴史・民俗・自然を主体とする当館では、お披露目する機会が少ない資料たちでした。そこで今回、府中に暮らした人々がどのような書画を収集・所蔵していたのかという視点で、これらの一部を展示することにしました。

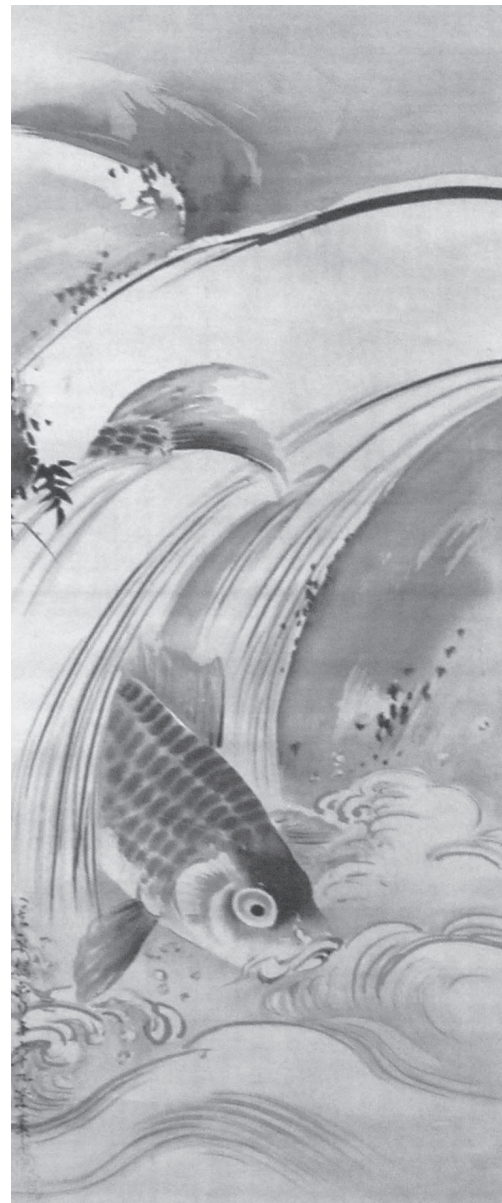
それでは、展示予定の作者を少し紹介しましょう。まずは、人気どころの狩野探幽と谷文晁から。探幽は江戸時代初期の狩野派の絵師で、文晁は江戸後期の文人画家です。2人とも贋作が多いことで知られ、文晁にいたっては100のうち99が偽物とも言われています。それだけ人気が高く、多くの人に好まれたので、府中にも彼らの作品とされるものが複数残っています。

次は、府中出身の江戸時代中期の画家・関良雪について。良雪は、六所宮（大國魂神社）の社家の家に生まれ、40歳を過ぎてから江戸へ出て画業に専念しました。室町時代の有名な水墨画家である雪舟らを手本とし、人物画を得意とした人物です。なんととっても地元縁の画家ですので、こちらも数点を当館で保管しています。

一方、書は、文化5年（1808）末から翌6年4月にかけて府中を訪れた幕府の役人で狂歌師の大田南畝や、幕末の三舟のひとり山岡鉄舟、寛政改革で知られた松平定信のものもあります。

本展示会では、それらの作品をスペースが許す限り展示します。真贋の判定や美術的な解説はあ

りませんが、人々に好まれた作者は誰か、画題は何か、何故その作品が残されているのかなど、それぞれの観点からこれらの書画を鑑賞していただきたいと考えています。（花木知子）

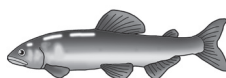


伝 狩野探幽画「滝の鯉」
落款には「法印探幽行年六十九歳筆」と記されている。

多摩川今昔

TAMAGAWA IMA MUKASHI

④アユは帰ってきたけれど…



江戸時代以降、多摩川はアユの川として知られるようになりました。明治・大正頃までは、人工物が加わることのない自然河川で、アユは季節ごとに河道を自由に歩き来していました。初夏から秋にかけて、本流には多数のアユが遊泳し、下流の丸子（大田区）から上流の氷川（奥多摩町）、さらには源流域の丹波村（山梨県）まで遡上があったと言います。また、五日市（現 あきる野市）を流れる秋川や八王子を流れる浅川など、支流にも生息範囲を広げていたようです。

しかし、時の流れはこれに歯止めをかけます。江戸時代に徳川家光が羽村に構築した玉川上水取入口に、1891年（明治24）浄水道の取入口が設置されました。但し、当初は堰堤（現在の羽村堰）の構造が不完全で、魚類への影響もさほどありませんでした。とこ

ろが、その後状況が変わります。「東京市の膨張とともに飲料水の激増をきたし、ために同堰堤をきわめて完全なる構造に改めたるをもって、魚族の遡上すこぶる困難となり、ついに堰堤上流十余里の間、遡河魚類の影を没し、ために沿岸漁業組合は解散のやむなきにいたりけり」（都水産試験場事業報告書）。遡河魚類とは、海から川へ遡ってくる魚で、多摩川ではアユを筆頭にサクラマスやウナギなどが該当します。明治から大正時代に、すでに羽村堰によってこれらの種が上流域への遡上を妨げられていたことがわかります。

さらに時は流れ、1960年代の高度経済成長期。中流域では宅地開発や工場進出が進み、流域人口も倍増、多摩川へ流入する生活・工場排水は大幅に増加しました。それまで下流から中流域には普通にアユの遡上が見られていましたが、急激に悪化した水質の影響で、ついに多摩川にアユが戻る

ことが無くなってしまったのです。元来清流を泳ぐ魚だけに、汚れ切った川への帰還は選択の外となったのでしょう。

しかし、この事象は速やかに解消されました。高度経済成長期が過ぎ、公害や環境問題への国民の意識は高まり、1970年代には公害防止関連の法律も成立したことで、多摩川の水質は下水道の普及などで改善されたのです。アユの天然遡上もふたたび目視可能になりました。1980年代から中流と下流の境目にある大田区の調布取水堰で、



大丸堰のハーフコーン型魚道

遡上するアユのカウント調査が始まると、年毎にその数は上昇していったのです。

但し、先の羽村同様、堰の課題が再燃します。多摩川には治水や利水のため多くの堰やダムが作られていました。特に中流域で数か所に及ぶ堰は、アユに限らず遡上する魚の行く手を遮る構造になっていました。せつ

かくの遡上アユ増加でしたが、上流までの道のりを阻害されては元も子もありません。当時の建設省（現 国土交通省）が動き、1992年に「魚が上りやすい川づくり」モデルとして多摩川が指定され、その後は各堰に魚道が整備されました。魚道は、段差のある堰の脇に設けられたスロープ状の通り道です。構造の改良が重ねられ、堰を越えてアユの遡上範囲は拡大しました。さらに先述の調布取水堰では、近年春先に堰の開放を行い、他種も含めて画期的に効果を上げています。もちろん、すべての魚が漏れなく遡上できるわけではありませんが、少なくともそれまで治水や洪水対策一辺倒だった中流域の河川管理に変化をもたらしたことは大きな成果です。本来の河川環境再現を視野に入れつつ、人々の生活とともに歩む多摩川を保全するにあたり、堰の役割は大きく……つまりは堰任重大というわけです。（中村武史）



太陽系惑星ツアー



⑧太陽系最果ての惑星 海王星

太陽系の惑星をご紹介します「太陽系惑星ツアー」は、ついに今回が最終回です。最後を飾るのは、太陽から一番遠い惑星「海王星」。太陽から約 45 億 km（地球と太陽の距離の 30 倍）の距離にあり、約 165 年かけて太陽の周りを 1 周しています。あまりにも遠くにあるため、地上から肉眼で見えることはできません。

海王星は、天王星と同じく巨大な氷惑星です。直径は地球の約 4 倍、表面温度は -200℃ 以下、大気は主に水素とヘリウム、メタンなどでできていて、中心には岩石と氷でできた核があります。さらに、細い 5 本の環と 14 個の衛星が発見されています。「海王星」と書きますが、海があるわけではなく、大気に含まれるメタンが赤い光を吸収し、青い光を散乱するため、海のように青く見えます。

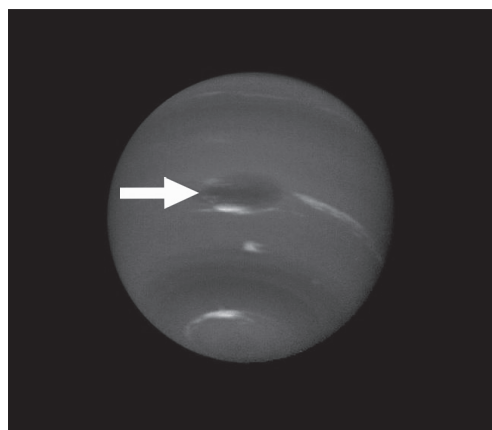
海王星は、天王星の発見（1781 年）から 65 年後の 1846 年に見つかりました。前号までにご紹介した水星から天王星までの惑星は、肉眼や望遠鏡を使う観測により発見されたものですが、海王星は、数学的な計算によって予測され発見された唯一の惑星です。海王星が発見される前にも、海王星の位置を記していると考えられる記録はありますが、惑星とは認識されていなかったようです。

海王星を訪れた探査機は、アメリカの「ボイジャー 2 号」（1989 年）だけです。ボイジャー 2 号は、海王星に接近し、大気や環、衛星について調べました。この探査で、海王星の大気に大きな渦「大暗斑」（右画像）が発見されています。大暗斑は、地球くらいの大きさがあり、時速 2,000km を超える強い風が観測されました。ところが、1994 年にハッブル宇宙望遠鏡が海王星を観測したときには、大暗斑は消えていて、別に新たな暗斑が出現してしまし

た。木星にも大暗斑に似た「大赤斑」がありますが、300 年以上消えずに存在しています。海王星の大暗斑はなぜ消えてしまったのか、消失や出現のメカニズムは現在でも謎に包まれています。地球の大気は太陽からの熱によって変化していますが、海王星は太陽から遠く離れているため、太陽から受けるエネルギーは、ほんのわずかです。しかし、大気中の大暗斑が変化しているということは、海王星の内部に熱源がある可能性があるようです。極寒の星なのに、内部に熱があるなんて不思議ですね。

海王星は、現在うお座の方向に見えているため、秋ごろに観察するのがオススメです。肉眼では見えないので、観察には望遠鏡が必要です。博物館で毎月行われている星空観望会でも 2023 年 9 月～ 11 月は望遠鏡で海王星を観察します。太陽系最果ての惑星をぜひ望遠鏡で眺めてみてください。

8 回シリーズでお送りした「太陽系惑星ツアー」はいかがでしたか？ 同じ太陽系の惑星でも、それぞれ特徴がありました。晴れた日には、地球の兄弟星である惑星を探してみてください。（上野アイ子）



ボイジャー 2 号によって撮影された海王星と大暗斑（矢印）
写真提供：NASA/JPL